

質的インタビュー、あるいは対話の技能

Brigitta SCHMIDT-LAUBER
ブリギッタ・シュミット・ラウバー

翻訳：及川祥平／クリスチャン・ゲーラット

はじめに

民俗学（フォルクスクンデあるいはヨーロッパエスノロジー）^{（訳注1）}は、歴史的論証によって現代を捉える文化学であり、日常文化、現実生活における当たり前な振る舞いや体験、それらについて人びとが行なう解釈を研究対象とする。したがって、民俗学には「人間」に接近するための方法論が必要とされる。そして、研究対象に接近し、主体のライフスタイルや解釈、振る舞いの型^{ムスター}の調査を行ない得る点こそ、質的研究^{（訳注1）}の強みである。質的方法に該当する諸方法は、研究テーマを空間や社会関係において位置付けながら構想され、会話や観察など、きわめて日常的で平易な手段に基づいて体系化されている。とりわけ、インタビュー調査は、長らく経験的現代研究の「王道」と見なされてきた [König 1974 : 9]。そして、今日も民俗学の様々な研究において効力を発揮している。例えば、病いをめぐる研究のような生活世界的観点 [Dornheim 1983] や近隣関係のような一般的テーマ [Honvehlmann 1990]、生活史上の一コマについての伝記的な調査、あるいは生活史の全体についての研究から [Lehmann 1983]、社会集団やエスニックグループへの調査のような複合的かつ微視的研究にも有効である [Welz 1991, Schmidt-Lauber 1998]。インタビューはその都度の必要に応じ、多様な手法をとる。ある時は半構造的インタビュー（Leitfadeninterview）^{（訳注2）}を採用し、ある時はグループディスカッション、あるいはナラティブインタビューを採用する。

「質的インタビュー」は様々な形式やアプローチを包摂する多義的な概念である。定義に通説が存在するわけではない。そのようなものが存在するのではなく、また、それが常に可能であるわけでもない。一つのディシプリンに固有のものであるわけでもなく、あらゆる分野で使用されている。民俗学の質的な口頭調査のパーспекティブを、歴史学や心理学、社会学そして民族学における質的インタビューから区別し得るとすれば、それは、民俗学に固有の学問的伝統（とりわけ、語り研究の伝統）の存在である。例えば、初期のオーラル・ヒストリー研究の目的は、それまで歴史の証人とは認められていなかった人々に発言の機会を与え、人々の記憶の中に過去の事実を探し出すことであつたが、それに対して民俗学は、語りの形式的な側面、具体的な状況において語られた出来事についての話者自身の解釈と意義づけにとりわけ関心を払ってきた。しかし、今日一般に、民俗学は、そのインタビューという方法とそれへの方法論的反省を、多数の社会・文化学的分野と共有していることを強調しておきたい。

1. 学史的な概説

19世紀前半以降、とりわけ、民俗学がアカデミックなディシプリンとして組織化されて以来、口頭調査はこの学問における方法の一つと見なされている。資料の面からみた時、1960年代までの民俗学的研究を特徴づけていたのは、初期のヴィルヘルム・マンハートの調査や分布図的研究^(原注2)などの書面による質問調査や語りを日常的文脈において調査する試み [Brinkmann 1933]^(原注3)であった。しかし、この時期の研究の特徴は、「代表的人物」をピックアップしつつ研究が行なわれる点にある。すなわち、一人のインフォーマントの発言が一般化され、「共同体 (Gemeinschaft)」を代表するものと見なされていた。資料の分析に際しては、ジャンル論の関心とならんで、語り手個人に対しても関心が寄せられていた [Asadowskij 1926]。しかしながら、他のディシプリンと同様に、民俗学においても、コミュニケーション論的な前提は議論に反映されてはいなかった。語りが行なわれる状況や環境の影響、あるいはテキストの機能、研究者との人間関係の調査結果への影響という問題は、省みられなかったのである。

民俗学的なカノンや研究方法への批判に伴い、1970年代、民俗学は社会学的方向へと傾斜し、批判的科学への道を歩んだ。この経過の中で、社会科学的な指針に沿う形で質的研究が行なわれるのと同時に、とりわけ量的な調査が実施された。そこで期待されたのは、社会・文化的なプロセスの「精密な測定」と統計的分析を通して、既存のナイーブな手段や、文化的現象の起源や不変性そして固有の性質をめぐる推量的な命題に、「具体的で」「客観的な」結果を対置し得るようにすることであった ([Schenda 1986 (1970)] 参照)。このような傾向は、現在はいよいよ「インフォーマント」と名付けられている「調査対象」の位置付けにも反映されてきた。すなわち、学校の先生や神父のような、コミュニティの有識者をインフォーマントに選択するアプローチ (代表性の原則の使用) が否定され、サンプル調査法、もしくは、代表性の理想像の転回が引き起こされた (例えば [Matter 1978])。

方法論についての議論は、1970年代末以来のリアル論争^(原注3)の中で最初のクライマックスをむかえた。この論争があったからこそ、経験的研究の前提や手段をめぐる対立的な意見が表明され、方法への意識が高まることで、新たな方法論議の展開が発生したのである。「重要な問題は、数字では表現できない」ということの体得、そして、さらなる生活への接近、日常文化、社会組織内における体験の主体であるところの個人への焦点化への呼びかけは、1980年代における「民族誌の次元の再発見」を導いた [Jeggle 1984 : 13]。それ以来、「質的」なやわらかい研究方法は、今日にまで継続する優勢な地位を確立した^(原注4)。その際、民俗学は、理解社会学に密接に結びつく質的な社会研究だけではなく、エスノロジーとそのフィールドワーク・コンセプトにも影響を受けた^(原注5)。この経験的アプローチのエスノロジー化とともに、民俗学における方法的意識をさらに鋭くする反省的なプロセスが徐々に発生していく。それ以来、研究者とインフォーマントの関係をめぐる関心はさらに強まっている (以下を参照)。このような方向性のもとで、時としてエスノグラフィックインタビューとも称される質的なインタビュー調査は^(原注6)、民俗学にとって中心的な、しかし、他の方法とも相補的な手段として位置付けられているのである。

質的なインタビューと他の方法との併用は、すでにその有効性が確認されている。例えば、定量的な書面調査、口頭調査や自伝の公募、アーカイブの資料や同時代の記録の分析等との組み合わせである。加えて、非常に高い頻度で質的インタビューと組み合わせられるのは観察的手法である。これについては、日常的な言語表現の方法やふるまいの型という問題は通常インタビューでは明らかにできないということを考慮する必要がある。なぜなら、インタビュー調査は、そこで行なわれているコミュニケーションのとり結び方が常に意識される場であるという点に特徴があり、日常的な事柄についての説明もそのような状況に規定されてしまうのである。質的インタビューでは、解釈や思考、主観的な発言を引き出すことができるが、日常における現実のふるまいを資料化することはできない。すなわち、インタビューにおいて明らかになるのは、話者が自身をどう見ており、またどのように見られたがっているのかという点である。現実におけるふるまいや日常的な表現の手法についてインタビューによって獲得できる情報は、制限されたものでしかない。そのため、多くの場合、インタビューという方法は、(参与)観察、あるいは、より正確には、日常的な生活の文脈やその生活実践を可視化する(民俗学的な)フィールド研究法への埋め込みが行なわれる。同時に、質的な口頭調査に際しては、インフォーマルな、すなわち「自由な」会話も伴う。インフォーマルな会話とは、レコーダーによる記録が行なわれず、多くの場合、自発的な日常会話であり、それゆえ、その出会い自体も、目的をもった約束に基づくものではないような種類のコミュニケーションである^(原注7)。日常的な語りの基本的な内容と形式は、そのような参与観察とインフォーマルな会話の分析に基づいて究明することができるのである。

2. 調査について

口頭での質的調査の中心的な特徴は対話性である。この対話性は、以下の点を考慮するかぎりにおいても、質的研究の不可欠の方法論的前提として今日もなお有効である。すなわち、「コミュニケーションの原則」によれば、社会研究者は「研究対象とコミュニケーション関係を結び、それに際しては、研究対象が有しているコミュニケーションの規則システムに依拠することになる」[Hoffmann-Riem 1980: 344]。インタビュアーの基本的態度の特徴は、共感的であり、かつ、相手の主観的視点を理解しようと努力を払う点にある。理論と経験の相互性を損なわないための第2の前提は「開放性の原則」である。それによれば、研究対象の理論的構造化は、研究プロセスにおいて自ずと形成されてくるまでは先送りにされる([Glaser/Strauss 1967] 参照)。したがって、研究を進めていく過程では、新たな問いの設定とパースペクティブの切り替えが生じる。研究のプランニング、資料調査、その分析は、理想的には連続したステップであるが、実際には並行的に経過するプロセスである。

(1) インタビューパートナーへの接近法

ここまで確認してきたように、質的研究の基本は、日常世界におけるコミュニケーションにある。しかし、それらのコミュニケーションの方法は、日常生活においては無反省的に使用され、前学問的な状態で存在している。それゆえ、それらの方法を学問的に使用するならば、それを研

究実践として反省し、研究者としての自己を、あるいは、インフォーマントとの交流を批判的に検討することが、とりわけ重視されねばならない。この批判的反省は、すでにインフォーマントへの接触や、会話の牽引といった段階から適用されることになる。

会話パートナーの選択と彼らへの接近については、民俗学は詳細な反省を行なっている。なぜならば、この最初のステップがすでに、分析結果に重要な影響を及ぼすからである [Lindner 1984]。時には、メディアを通じたインタビューパートナーへのアプローチが行なわれることもある。すなわち、インフォーマントの公募である。この場合、とりわけ自己を伝えることを好み、また自己を演出することに慣れた様々な人物が応募してくることになる。また一方で、教師や教会の顔役、経営者、同好会などの集団の有力者など、なんらかのエキスパートやマルチプリケーター (Multiplikator) とも呼ばれる知識や情報を伝達する人物によってインフォーマントが紹介されることもある。このような第三者や有力者からの紹介は、研究者とインフォーマントとの関係の性質に疑問の余地なく影響を及ぼすことになる。また、それ以外の方法としては、雪だるま式の原則によって次のインタビューパートナーを紹介してもらうことでサンプルを拡張させる方法や、会話パートナー自身が研究者に接近してくるようなケースをあげることができるが、このような場合も、やはりリフレクティブな熟考と解釈を要するような、人間関係の固有のネットワークが浮き彫りになってくるのである。さらなる道筋としては、理論的見地からインフォーマント探索の道筋を定める「理論的サンプリング」^(訳注4) がつづく [Glaser/Strauss 1967, Strauss 1994]。

これらすべてのアプローチにおいて、とりわけ調査結果の分析に際して考慮されるべきことは、調査の意図、会話に際する相互的な興味、およびインフォーマントの側の受け入れ態勢、そのようなパートナーとの関係といった諸点である。研究者による自己提示は、インフォーマントから伝えられる情報にも影響を及ぼす。あるいは、「被調査者」が研究者のことを把握するあり方にも重要な論点が潜んでいる。著名な例としては、研究者が「スパイ」や政府の一員としてみられたり、自身のメッセージを社会に伝えてくれる、ある種の「スピーカー」として意味付与されるケースがあげられる [Fischer 1985]。研究者はインフォーマントに (問いかけたり、耳を傾けたり、あるいは質問に答えたりしながら) アプローチする際、決してニュートラルな立場にたっているわけではない。むしろ、そこでの両者の立場とは、インタビューを行なう状況や、対話の相互性のもとで構成され、遂行される (ことでたち現れる) 役割制ということができる。ここでは外部からの意味付けが行なわれることもあるし、戦略的な自己提示が行なわれることもある。例えば、危険な自動車工場の労働現場という同じ環境であっても、そこで大学教授として振る舞うか、「労働組合の支持者」として振る舞うかによって、聞き知れる事柄は相違する。女性の研究者であれば、多くの場合、男性では入れないようなフィールドへもアプローチすることができる。かつての民俗学においては、研究者の戦略的なふるまいについては、以下のように考えられていた。すなわち、研究者は「ナイーブ」なふるまいで状況に順応することで、現実の事象について、外部の影響を受けていない「客観的」な情報を入手できるというものである [Fischer 1989, 1985a : 10]。それに対して、研究を開始することそれ自体がすでに対象に「攪乱」を生じさせ、現実へのパースペクティブはいつでも相互的に調停されながら効力を発揮するという認識に基づいて、現在の研究者は関係の真正性に留意し、自己の個性を最大限抹消せずにインフォーマントと向き合うようなアプローチが要求されるようになった。すなわち、研究者が自分の立場

を否認したり、インフォーマントと自己を同一視し過ぎたり、あるいは同意見を装ったりすることは行なわれるべきではないのである [Lindner 1981 : 65]。もちろん、調査対象者に不利益を及ぼさないという研究の大前提は変わっていない。

（2）質的インタビューのバリエーション

さて、質的インタビューとはいったい何であろうか。そして、どのようなインタビュー形式があるのだろうか。よく知られた定義によれば ([Scheuch 1967 : 138] 参照)、インタビューとは計画的で学術的な行為であり、発話欲求を刺激したり合目的な質問を投げかけることを通じて、対話パートナーの言語表現を導くことである。以上のような一般の定義ではなく、実践面から言えば、質的インタビューは人間的なコミュニケーションの特別な形式の一つであるということができる。というのも、質的インタビューにおいては、コミュニケーションの前提条件は日常会話のそれと同じだが、日常会話を成り立たせている規則は有効ではなくなる。それゆえ、それは一見、まったく自主的なコミュニケーションであるかのように装う「偽りの対話」とも呼ばれる [Hopf 1978 : 107]。今日、一般に認知されているのは、インタビューが（うわさ話や説教、改宗譚、ことわざ、寓話といったものと並んで）コミュニケーションの一ジャンルを形成しているという点である。これがなぜ独立したジャンルたり得るかといえば、それは、会話への参加者の誰もが知っているコミュニケーションパターンに基づいているからである^(原注5)。このパターンは、コミュニケーションの経過に大きな影響を与える。このパターンに基づいて、誰もが会話の経過に予測・期待をもち、行動の型を決定する [Luckmann 1986 : 201 - 202]^(原注8)。

その他の調査と同様に、様々な種の質的インタビューにおいても、研究方法の選択は主題との関係で確定されねばならない。質的インタビュー（開放的インタビュー、柔らかいインタビュー、非構造的なインタビューなど）の領域において、専門用語と研究実践の統一はこれまで行なわれていない。そして、その間に、質的インタビューの若干のバリエーション（サブジャンル）が形成されてきた。問題中心的インタビュー、焦点面接法、深いインタビュー等はその一例である ([Hopf 1995 : 177] 以下の頁、[Mayring 2002 : 49] 以下の頁。<http://www.qualitative-research.net> [2015年5月17日閲覧] を参照)。個々のインタビュー形式を区別せしめるのは、構造化の程度とあらかじめ公式化された主要な質問とのつながりの強さである^(原注9)。これらに共通するのは、会話における硬直した「質問-応答図式」が崩され、インタビュアーにおいて、また特にインタビューされる人物にとって、対話の中で自由な判断を行なう余地が比較的大きく確保されている点である^(原注10)。質的インタビューの目的は、打ちとけた語りの状況を作り出し、会話パートナーに彼の体験や考えを過不足なく、かつ、比較的慣れた発話形式で語ってもらうことなのである。

民俗学においても、用語の選択には未だに大きな混乱と未統一状況がある。このような状況は、研究者が様々なソースからそれぞれの用語を引き出してくることに起因しているが、その問題性は主に以下の局面で顕在化するといえる。一つは、インフォーマントとその発言の獲得、その位置付けをめぐる専門用語の使用に際してである（インフォーマント原則）。もう一つは、理論的カテゴリー（ナラティブインタビュー）の使用に際してであり、3点目には問題設定と研究者の視点によって定義された概念（例えば、伝記的インタビュー）、4点目には、実践形式の問題へとつながっていく（半構造的インタビュー）。ここで、これらのバリエーションを明確にインタビューの体系の中に位置付けるべく、第4の識別水準を取り上げ、質的インタビューの二つの一般

的な実践形式を紹介してみたい。すなわち、オープン・インタビュー（その一般的なバリエーションには、ナラティブ・インタビューがある）と、半指示的インタビューともいわれる半構造的インタビューである。これらは、構造と規格化の点で相互に異なり、ともに多様なバリエーションをもつ。

オープン・インタビューは、あらかじめ問いや語りを構造化することをまったく放棄する。すなわち、対話パートナーに出来得る限り多くの自由を残しておくのである。その一般的なバリエーションがナラティブ・インタビューであり、今日の民俗学においても極めて頻繁に使用されるインタビュー技術の一つである。それゆえ、ここで詳細に言及しておきたい。この方法は、特に生活史への関心に即して頻繁に使用されるが、この文脈においては「個人誌的インタビュー」^(原注11)としても特徴づけられる^(原注12)。

理想的には、ナラティブ・インタビューは次のように表現することができる。すなわち、ナラティブ・インタビューの第一の理論家であるフリッツ・シュツェによれば、その基本的な考え方は、「ツークツワンク (Zugzwang) = 語らざるを得ない状況」^(訳注6)を利用した語りの「誘い出し」であるという [Schütze 1977]。いわゆる、詳細な説明を導く「ツークツワンク」や語りの完結を導く「ツークツワンク」、話題の凝縮を導く「ツークツワンク」である。インタビューは、インタビュアーが「語りを発生させる刺激」を与えるフェーズからスタートする。インフォーマントがこの語りへの要求に従った場合、次の「即興の語り」というフェーズに進む。次に、問い返しフェーズが続く。とりわけ、人生史的な問いの場合には、このフェーズが、総括的にインタビューを完成させることがある [Hermanns 1995: 184]。

インタビューをこのように考えてみることで、この方法の根源的問題の一つが明らかにされる。すなわち、シュツェの図式化されたインタビュー状況のイメージのもとでは、インフォーマントは自身の意志に反して特定の刺激に自動的に反応するだけの存在であり、単なる情報提供者に還元される。その一方、インタビュアーは「ナレーション・アニマトゥール (語りの主導者)」として、情報を明らかにする存在として位置付けられるのである [Bude 1985]。この形式主義的なモデルに対し、発話実践への注目からは、インフォーマントの語りを導くものとして、インタビュアーによる励ましや、インフォーマントとインタビュアーの関係、コミュニケーションの場の状況、インタビュアーそれぞれのコミュニケーションスタイルも関係していることが明らかにされている。「データ」は、インタビューの場の人間関係や状況がフレキシブルかつ自発的であるからこそ、説得力をもつのである。したがって、インタビューへの要求とその実践の乖離は、シュツェ的なナラティブ・インタビューの根本的問題の一つといえる。さらに批判すべき点は、シュツェが語られた体験と実際の体験とを本質的に等質のものとして想定し、個人の語りのみを用いて第一次的な体験を再構成する方法を主張したことである [Bude 1985]。シュツェにとっては、「語り」は体験の反復・再現の方法と理解されたのである。それに対して、民俗学は、語りと体験を分析的に分離し、語りの中に、独自の体験とは区別される文化の型^{ムスター}を追究することを重要な課題としている。すなわち、人びとが、語ることを通して、自身の体験にそれまでは存在しなかった意味・解釈を与えている側面を研究課題とすべきなのである。

ナラティブ・インタビューが、民俗学的・民族学的研究、とくに語り研究の領域で普及している理由は、民俗学に、インタビューの参加者が自由な発話を行ない得ること、パートナーの立場性の優位が確保されること、そして、インタビューパートナーの自由な語りを重視する、とい

う傾向が存在したからである。その際、トークツワンク（語らずにはいられない場）などの前提や即興的な語り^{（訳注7）}は決定的な役割を果たしてきた。しかし、問題なのは、ナラティブ・インタビューを用いるに際して、研究者がどのような理論的・方法的立場にたつのか、多くの場合、明示されないことである。例えば、シュツツェのいう、体験と語りの本質的同質性という前提に深く依拠しているのか、あるいは、意図的に語りのスタイル（そこにはエピソードや「物語」という要素が含まれている）を導くという形式面でのみシュツツェ的手法を採用しているのか、明らかにされないのである。その意味で、ここで必要とされるのは、概念の明確化と方法意識の先鋭化である。すなわち、社会学において受容されているシュツツェ的なナラティブ・インタビュー理論からの離脱と、「方法的実践」としてのナラティブ・インタビューへの志向を避けて通ることはできないのである（〔Schröder 1992: 11〕以下の頁を参照）。

「半構造的」インタビューは、オープン・インタビューと同様に、あらかじめ決まった回答のフォーマットをもたない。これは、とりわけ、特定の限定されたテーマと質問のカタログに依拠しつつ発話を手に入れるべき時や、あらかじめよく知られているような複雑なテーマについて調査をするような場合、効果を期待することができる。調査者があらかじめ用意する問題やテーマに関するノートは、非常に詳細なものもあるが、きわめて簡単なものの場合もある。いずれにせよ、それがどのようなものであれ、発話の比較可能性を担保する強固な構造化と統一化をもたらすのである。しかし、ここでも、構造的インタビューにみられるような硬直した質問技術は用いられるべきではない。この種のインタビューの実行は、むしろ逆に、発話の状況にあわせて質問をさりげなく持ち出すことを要求する。質問リストに拘泥し過ぎないことが重要なのである。なぜならば、質問リストを用いたインタビューは、常に、期待されている自然な発話状況を妨害し、「官僚主義的」な感覚で、根ほり葉ほり尋ねることに終始してしまうリスクを帯びている（〔Hopf 1978: 101〕以下の頁）。理想的には、インタビュアーはインタビューのプランを念頭に置きつつも、質問の順序、その完全性、新たな問題領域への接続可能性を考慮した柔軟性を持つことが望ましい。とりわけ、問題中心的インタビュー^{（原注13）}ならびに焦点面接法^{（原注14）}においては、会話を方向づけるために設けられたリストであっても、これにこだわり過ぎるべきではないのである。

インタビューの新しい形式の一つに、いわゆる「E-インタビュー」〔Schlehe 2003: 81〕参照というものがある。これは対話パートナーとの間に地理的な距離があるケースにおいて、問い合わせと資料産出の可能性を切り拓く。しかし、以下で行なうインタビュー実践に関する指摘は、フェイス・トゥ・フェイスの出会いを前提としている。したがって、E-インタビューの中でも、例えば、ビデオチャットによって実施されるようなタイプのものみに本稿の議論は適用できる。これに反して、一人で文字を介して行なうような、やり取りに時差が発生するコミュニケーションもE-インタビューの範疇に属すが、直接的な対話関係ではないため、本稿の議論とは関係しない。メールなどの非対面的なやり取りには、対面的やり取りとは異なる特有のコミュニケーションモードと回答のダイナミクスが存在するからである。

（3）インタビューの行ない方

ここまで、以下の点が明らかになった。まず、民俗学が人々の日常生活形式を出発点とするならば、そのような性格は、方法とその状況に即した使用のあり方にも反映されている。例え

ば、インタビューが行なわれる場所は、回答者に可能な限り選択が委ねられ、そこでのテーマ設定も臨機応変に確定されるべきである。例えば、労働世界の調査に際しては、その時々の仕事場でのインタビューが検討される。しかし、開放的な対話の雰囲気为确保するために、多くの場合、質的インタビューはその対話パートナーの家庭で行なわれる。これによって、同時にプライベートな生活領域を観察することもできる。

インタビューパートナーには、一度の、あるいは幾度かの予備的打ち合わせにおいて、調査の目的と一般的な方法を解説するのが普通である。その際、録音機を利用してインタビューを記録することの同意も得る^(原注15)。実際の対話においては、一般的に、回答者は彼の人生のエキスパートとみなされ、そのような存在として問いかけられることになる^(原注16)。彼は可能なかぎり自由な表現を行ない得るべきである。そのため、無制限の回答の余地を有し、適切な長さの語りを促すような、直接的ないし間接的な自由形式の質問がおこなわれる。とりわけ、重要なのは、質問と回答の関連に意識的になることである。すなわち、誘導尋問、特に、いわゆる「何故」という問いの発し方は、相手の釈明や弁解を引き起こしてしまう([Richardson/Snell Dohrenwend/ Klein 1993] 参照)。同様に、対話パートナーのどの言明が自発的なものであり、どれがこちらからの問いに答えようとした発言かを問うことも有益である。

インタビューにおける発話の促しとしては、言葉による刺激とならんで、テキスト(詩、新聞記事など)やモノ [Kuntz 1989, 1990] を手がかりとするような質問も疑いなく有効である。それによって、インタビュー実践においても民俗学における物質文化の位置づけが考慮されることになる。他方で、モノの意義、人生における意味、歴史的機能も会話によって理解することができる。最後に、特別な注意に値するものとして、写真を手掛かりとする調査がある。写真はインフォーマント自身の「記憶への橋」として機能する [Buchner-Fuhs 1997: 213]。インフォーマントの個人的な写真や研究者の提示する絵画によって、主観的記憶を想起させ、過去をめぐって語ろうという意欲をおこさせ得る。そこに写されている(描かれている)歴史的体験が、ありありと思い浮かべられるのである。現代的現象に付与されている意味を知る上でも(すなわち、話者による事物への印象喚起)としても、日常文化と関連する何がしかのものを描いた絵画は適しているといえる ([Schmidt-Lauber 2003: 31] 参照)。

会話内容についての確認の質問や、ときには自身の印象や体験への言及を通して、日常会話^(原注17)の基本的な規則の一つである相互性が対話に与えられる。それによって、誰が聞き、誰が語るのか、誰が質問し、誰が答えるのかという役割は転換していくのである。しかしながら、日常会話とは対照的に、質問者と被質問者の役割はインタビューにおいてはあらかじめ決定されており、一般にもそう理解されている。「自然さ」と会話の相互関係を達成しようとどれほど努力したとしても、インタビューは日常的でもなく、当り前な会話でもないのである。研究という状況、そしてインタビューという状況の特殊性は、対話パートナーも意識している。そして、それに応じて相互の語りが導き出される。この点は、レコーダーによって明らかになる。多くの場合、長時間のカセットレコーダーによる録音は同意されるが、録音されているということが「忘れられる」ことはない。インフォーマントは、録音機に対してのコメントや、機器のスイッチをきることを求める発言によって、繰り返し、語りを中断する。例えば、「録音されている場ではそれは言えない」というコメント、あるいは逆に「ちゃんと記録しなさい」という要求が行なわれる。ここからは、インフォーマント自身が発言内容について行なっている反省や、インタビューが行

なわれているということへの意識が明らかになる。極端な場合、レコーダーは、会話を遮断することもある。

対話実践においては、親密さ、強制的ではない会話の雰囲気、信頼に満ちた関係の構成が目指される。しかし同時に、インフォーマントとの間に距離を保つことでバランスがとられるべきであることは間違いない。なぜなら、この距離によって、研究者の目的意識の保持や会話で語られたものの分析的受容が行なわれ得るのである^{（原注18）}。

3. 記録とその分析的処理

インタビュー実践の基本的なステップは資料の保全である。会話の電子記録のほか、いくつかの方法がある。直接のインタビューに引き続いて「会話プロトコル」が執筆される。その際、綿密な状況の記述が行われる。テープに録音されていない場の様相、ムードや雰囲気、部屋の特徴、個人情報と発話者の振る舞いといった基本事項が書きとめられることになる。これによって、プロトコルには第一次的な分析が含みこまれることになる。その情報は、発言の状況と文脈を再構成するのに役立つのであり、発言内容の適切な解釈に際して、不可欠な補足になる^{（原注19）}。通常、対話パートナーはカード目録のような形でリスト化される。比較可能なデータ（年齢、会話の期間、時期、職業など）のセットを手元におくためである。加えて、収集可能な記録としては、インタビューの状況や会話パートナーの映像・画像をあげることができる。

驚くべきことに、重要であるにも関わらず研究実践の中では明示的には使用されていない資料として、調査期間を通じて継続的に書きとめられている「調査日誌」がある。ここには、研究の経過、調査時点における社会的あるいは政治的な変化、ならびに、最初の知見、そして、とりわけ、個人的な印象や気分が書きとめられている。加えて、ここには研究のその後の展開や後に新たに構想された研究とも関わるような考察や問いが含まれている。日誌は調査時点を再想起する手掛かりともなる。すなわち、時間の経過してしまった調査時の足取りを省みたり、批判的に照らし出すことができる。しかし、中心的な記録は、やはりインタビューのトランスクリプトということになる。

（1）トランスクリプト

インタビューの分析にあたっては、口頭での言葉のやりとりを文字テキストに置き換える。トランスクリプト（〔Dittmar 2004〕参照）に関しては、記述の適切性と真正性という問題がある。加えて、トランスクリプトは事象の描写であるのか、翻訳であるのか、あるいは文学的・芸術的な行為として判断すべきなのかという重要な問題が存在する。いずれにせよ、トランスクリプトの作成とは、単なる情報の処理ではなく、むしろ同時に資料に変化を与えるものであるということが、今日は意識されている。口頭で発せられた言葉を文字テキストという異なる表現形式のもとに置き換えることで、新たな人工物が生みだされるのである。すなわち、口頭発話特有の言い回しの規則や形式、美的感覚や説得性のあり方の影響下にあるものを、書かれた言葉に置き換えるのである。それにも関わらず、民俗学におけるこの作業ステップは、これまでほとんど反

省的に考察されてこなかった。方法の選択に関する統一性は存在しなかったが、説得力のある既存の研究をモデルとして用いることができる（〔Schröder 1992 : 91〕以下の頁）。いずれにせよ、真正性と読みやすさの関係、口頭的・日常語的独自性の確保とその適切な文字テキストへの移し替えとの間に横たわる問題ぶくみの関係は、そのつど、時と場合に応じて決められなければならないだろう。しかし、トランスクリプト化の規則は一つの研究の中で統一されるべきであり、調査においては公開されるべきである。

トランスクリプトは、ある程度の事前解釈に基づいて作成される。そのため、理想的には、研究者は調査だけではなくトランスクリプトの作成も自身で行なうべきである。しかし、この点は、大規模な研究プロジェクトにおいては、なかなか実現できないこともある。とにかく、トランスクリプト作成は調査プロセスの早い段階から開始されるべきことは明らかである。何故ならば、調査の初期における自身の解釈や、調査の中で欠落していた情報、あるいは答えが得られなかった質問などを、引き続いての会話において考慮することができるようになるからである。それに加えて、自身のインタビュースタイルを批判的に再検討する場合にも好都合である。分析の過程においても、録音された会話を聴き直すことで、トランスクリプトの内容は繰り返しチェックされねばならない。この手法の有用性は、時おり、文字形式のテキストとは全く異なる意味が話された言葉からもたらされる場合があること、そして、もともとの語りの状況が再び具体的に想起させられる点にある。

（2）分析

資料の分析は、調査およびデータの編集のあとで行なわれる。トランスクリプトは、分析に際してもっとも重視される。その目的は、質的で解釈的な方法に基づいて発話内容の意味を推定することであり、設定していた問いに関する確からしい説明と認識を得ることである。そのため、理論的に基礎づけられた方法としては質的内容分析^{（原注²⁰）}、あるいは社会科学的パラフレーズ、ナラティブ分析と客観的解釈学がある（〔Reichertz 1995〕、〔Lamnek 1995 : 107〕以下の頁、〔Flick 1996 : 196〕以下の頁、〔Bryman/Burgess 1999〕、〔Mayring 2002〕を参照）^{（原注²¹）}。とりわけ、社会科学的パラフレーズの対象よりはナラティブ分析の対象が、そしてそれよりは客観的解釈学の対象とするテキストのほうが、抽象度が高くなる。また、高度に理論化されていない方法としては、テーマ的・理論的に行なわれるコード化のようなものがある。とりわけ、類型の設定が有効であることは明らかである。すなわち、性、年齢、社会的地位といった基礎的なカテゴリー、あるいは、資料間に見出される共通性に基づいて設定された何らかの類型をふまえて、資料の分類が行なわれる。

個々の理論的に基礎づけられた分析および解釈の手法よりも民俗学にとってより重要なのは、共通的分析的な態度である。とりわけ、これは結論への帰納法による到達に該当する。質的研究は、仮説の再考を目的にするのではなく、記述的・探索的、あるいは主題産出的なアプローチなのである。すなわち、あらかじめ決定された理論が効力を発揮することは稀なのであり、逆に、主題、概念そして論証法は素材自体から考案され、後になって理論的関連の中に整理されるのである。質的研究の特徴は、演繹的なアプローチと相違して、対象の複雑性を未然に簡略化せず、むしろ、個々の発言の意味連関を、無数のデテールと視点との関連の中で引き出された多量の素材から再構成する点にある。それゆえ、歴史的ディシプリンとしての民俗学にとってもとりわけ重要な

は、発言の歴史性を主観的で環境に固有の形式において明瞭化することである。

したがって、分析の中心的段階は、発話データの文脈化である。すなわち、それ自体としてコミュニケーションの文脈のもとにあるインタビューの一コマは、対話が行なわれた状況やインフォーマントの人間性、ならびに空間的・時間的カテゴリと関連づけつつ位置付けられた上で、インタビュー全体を意識しながら解釈される。無論、ここでは社会的位置付けも考慮にいれられる。

その際、以下のことに注意を払わねばならない。すなわち、インタビューで提示される個人や集団の体験は、「人にみせても恥ずかしくない」ように熟考されたバージョンであり、聞き手と対話の状況によってコミュニケーションに切り取られた像なのである [Walzer 2000] この事実ではデータの説得力を弱めるものではないが、発言内容を解釈するには常に考慮に入れるべきである。発話内容は、適切な批判的眼差しにさらされねばならない。このため、インタビュー記録の外部にある資料も考慮される。例えば、対話の雰囲気についての記録や本来のインタビューに関連して、あるいは、それに先だって述べられた意見、第三者からの情報、観察調査の成果あるいは文字資料などである。

分析結果の妥当性を再検討するために、資料は以下の点から質的な基準が精査される。従来の典型的な基準は、妥当性（すなわち、把握すべきことは把握されたか?）、客観性と信頼性（すなわち、対象は正確に観測されたか?）（[Kasse 1999] 参照）であるが、質的研究においてはそれらの再定式化が行なわれ、あるいは新たな指針が求められることになる。それは、例えば、分析結果の有効範囲、インフォーマントが信頼できるか否か、発話の真正性、調査状況の透明度、調査プロセスへの反省といった基準である（例えば、[Welz 1991 : 67] 以下の頁）。解釈学によって良く知られている資料批判の一般的な方法の一つは、様々な研究者や方法、多様な地域や時代から検証すること、ならびに、多様な理論的パースペクティブを包摂することである。この妥当性を根拠づける方法は、社会科学においては、今日、三角測量（Triangulation）というキーワードで知られている。発話データの使用可能範囲の明確化に際しては、参与観察と非公式の会話によるデータも、それを補足し、調整する上で有効であることが証明される。

形式的には、個々の具体的ケースないしは個々の人間を解釈の中心に位置づけたケーススタディか（例えば、[Sedlaczek 1996]）、または、インタビュー全体、または選択されたカテゴリに基づくその一コマの概要比較分析（例えば、[Brake 1998]）が行なわれる。これは同時に、記述の中で経験的資料の特質を發揮させる二つの形式のあり方を示唆する。その一つは、個別事例を分離し、その特徴を全体として叙述する事例記述（引き続いての一般化を伴う）である。もう一つは、選択されたインタビューの一部の説得力に注目する形式がある。後者の場合、個別の主題領域に対し、異なるインタビュー例からの引用によって迫ることになる。

むすびにかえて

断言できるのは、質的インタビューは、とりわけ多面的な結果を獲得することができる方法だということである。しかし、同時に非常な困難を抱え込むことにもなる。質的インタビューは研究者に自身の先入観や不安と対決することを求める。すなわち、研究者に反省を促す方法論で

ある。それは研究のダイナミズムの証である。フィールドにおいて、あるいは、インフォーマントと研究者の出会いにおいて、繰り返し、「障害」が認識される。質的インタビューでは、その「障害」をこそ、調査にとって重大な「データ」として受け止めるべきである。質的インタビューは、自身の生活世界のエキスパートとしての個人の自己理解、日常の知識、個人的なイメージを提示し、主観的体験や主体にとっての意味構造、生活構造に接近する可能性を開拓する。質的インタビューは、深さと具体性を認識させる。それゆえにこそ、主観的な意味世界や生活史、歴史的次元における日常文化の研究のような民俗学・民族学の主要な問題設定には、特にふさわしい方法なのである。

原注

原注1：ゲルハート・クライニング (Gerhard Kleining) は、社会科学における質的研究をめぐる試論において、質的方法是、対象と主題が複雑に分化し、容易に概観しがたく、あるいは、矛盾しているような場合に適切であると解説している ([Kleining 1995 : 16]。また、[Arbeitskreis Qualitative Sozialforschung 1994] を参照)。

原注2：拙稿とともに『民俗学の方法 (Methoden der Volkskunde)』 (アルブレヒト・レーマン、ジールケ・ゲッチュ編、2001) に収録されているギュンター・ヴィーゲルマンとミヒャエル・シオモンの論稿を参照されたい。

原注3：プリンクマンは、居酒屋の個室に滞在し、メインホールの人々の語りをノートにとっていた。

原注4：それとともに、対話的状况において、話者と研究者との関係をフラットなものとして強調する「partner (パートナー)」という用語が、経験的研究において使用されるようになった。例えば、インタビューパートナーや対話者 (会話のパートナー = Gesprächspartner) 等である。個人と密接な共同作業を行なうようになったことで、かつては研究対象である個人を示唆するものであった「インフォーマント (Gewährsperson)」という概念も、位置付けを変えながら改めて使用されるようになった。

原注5：『民俗学の方法 (Methoden der Volkskunde)』 (アルブレヒト・レーマン、ジールケ・ゲッチュ編、2001) 収録の拙論「フィールドワーク」を参照されたい。

原注6：「エスノグラフィック・インタビュー」は、異文化理解を目的としてフィールドワークにおいて行なわれる、資料化を意識した対話を意味する専門用語である ([Spradley 1979, Schlehe 2002] 参照)。

原注7：インフォーマルな会話が終了し次第、詳細な記憶のプロトコルが作成されねばならない。この方法で獲得された情報は、調査成果の中に反映することができるが、大抵、逐語的な発話としては記述されない。

原注8：様々なコミュニケーションジャンルの外的構造 (例えば、コミュニケーションの環境・状況や参加者の役割、相互関係をめぐってあらかじめ共有されている認識) と内的構造 (所与の言葉とフレーズ、比喩、修辭的表現、ならびに文体) は、「自発的な」コミュニケーション行動より、高度の拘束力をもっている。

原注9：様々なインタビューを分類しようとすれば、手掛かりは、インフォーマントの数とインタビューの構造の程度ということになる。とりわけ、しばしば、民俗学においては、個人へのインタビューを実施する。しかし、それ以上に頻繁に、日常的なコミュニケーションにできるかぎり接近するために、個人以外にも、夫婦や家族との会話を調査している。それとは相違して、社会学において使用されるグループ・ディスカッションは、民俗学においては方法として小さな位置しか占められていない。

原注10：それにともなって、質的インタビューと量的インタビューとの識別基準が明確化される。それはインフォーマントの自由さの度合い (閉じられたインタビューに対する開放性) であり、インタビュアーの自由

さの度合い（構造化ないし規格化されたインタビューに対する非構造的、もしくは規格化されていないインタビュー）である。そして、インタビューの回答に関しては量的手法に対する質的な手法という区別である（後者については、質的 - 解釈法が利用される）。

原注11：個人誌的インタビューという名称は、対象領域と研究の問題設定と結びついている（〔Lehmann 1979/1980, Fuchs 1984, Fuchs-Heinritz 1998〕を参照）。個人誌的インタビューは、オープン・インタビューと同様に、例えばナラティブ・インタビューの手法においても、誘導を前提とする半構造的なインタビューにおいても構想され得る。

原注12：時おり、ナラティブ・インタビューの概念は、かなり拡大して捉えられ、半構造的で半指示的な個人誌的インタビューの略語としても使用される。その際には、人生における特定の一コマと現代史的な事件が中心に据えられる。しかし、後に詳述する本来の形式において、この点は考慮されていない。

原注13：問題中心的インタビューは、ウィツツェルの議論〔1982〕に従い、質問リストによる緩やかな方向づけを特徴とする調査であり、対話パートナーに最大限の自己表現の可能性を認める。それゆえ、これはナラティブインタビューと半構造的インタビューの中間形式である。

原注14：焦点面接法は、1940年代に、ロバート・マートン（Robert Merton）、パトリシア・ケンダル（Patricia Kendall）らによって、コミュニケーション研究およびプロパガンダ分析との関連において提起されたものであり、本来は集団への調査技術である。このインタビューは、その集団の誰もが以前に観たり読んだりしたことのあるもの、例えば映画や記事などのようなものを、語りの主題、あるいは発話への刺激としてあらかじめ確定し、十分に開放的な場において、その集団のリアクションと解釈のあり方を把握しようとするものである〔Merton/Kendall 1946〕。

原注15：記録といえは、通常は音声記録を意味する。オーディオビジュアル記録機材、映像機材とカメラは、従来民俗学においては、副次的な意味が与えられるか、エスノグラフィックな映画のように独得な位置付けが為される傾向にあり、インタビューのような通常の調査実践と密に結びついたものではなかった。しかし、現在では映像と写真は、単に記録メディアとしてのみならず、自立した表象の形式として考慮されている（〔Overdick 2004〕参照）。

原注16：これはいわゆる本来の意味での専門家の発話とは異なる。本来の意味における専門家へのインタビューでは、生活世界における個人やその主観的見解にはわずかな興味しかもたれない。むしろ、研究に関連する事象についての彼の知識に関心が寄せられる。通常、このような相違を念頭においてインタビューが構想される。

原注17：日常会話には、広義には医師や販売員との会話のような多様な形式が含まれるが、ここでは狭義に捉えたい。すなわち、ほぼ同格の人物間における相互的なコミュニケーションとして理解する。質的インタビューの特徴は、理想的には、インフォーマントにとっては当たり前な会話ではないものの、なにかを強制されることもなく、気安い雰囲気で行なわれることである。

原注18：『民俗学の方法（Methoden der Volkskunde）』（アルプレヒト・レーマン、ジールケ・ゲツチュ編、2001）収録の拙論「フィールドワーク」を参照されたい。

原注19：したがって、質的調査においては、通常、インタビュアーは同時に解釈者であり、調査に別の人物が雇われることはない。

原注20：質的内容分析はテキストの評価方法の一つとして一般によく知られているが、文化科学的インタビュー研究にとっては、独特の問題をはらんでいる。すなわち、質的内容分析に際しては、発話はコンテキストから引き剥がされ、潜在的意味は縮減されてしまうのである。

原注21：その際、頻度の分析は不可能ではない。とりわけ、人口統計学的データ（年齢、配偶関係、学校教育、職

業等)の量的な処理が実施される。しかし、質的方法において問題とされるのは、複雑な生活連関や類型への解釈的接近であり、データの代表性ではない。

訳注

訳注1：シュミット・ラウバー氏は、民俗学的ディシプリンであるところのフォルクスタンデとヨーロッパエスノロジーを併記しているが、本翻訳では、民俗学に統一した。

訳注2：半構造的インタビューは、事前におおまかな質問事項を用意して面談に臨むものの、調査対象者の回答に応じて質問を行っていく調査法である。

訳注3：リール論争の焦点は、演繹的アプローチと帰納的アプローチの対立である。論争の発端は、リールの『民俗学研究の秘伝』(Handwerksgeheimnisse des Volksstudiums)における経験的なアプローチについての解説、すなわち、「発見されたものを観察するのは簡単である。しかし、観察したいものを発見するのは難しい」という記述であった。このようなアプローチを批判したのは、ハンス・モーザー(Hans Moser)、ヘルゲ・ゲルント(Helge Gerndt)、ウッツ・イエグレ(Utz Jeggle)らであった。彼らによれば、リールは経験主義者ではなく、文人であった。一方、ギュンター・ヴィーゲルマン(Günter Wiegelmann)、そして、それ以後のアルブレヒト・レーマンらは、リールの方法論的なアプローチは適切であると評価していた。

訳注4：理論的サンプリングとは、質的研究に際して、目的に即して対象を絞り込んでいくサンプリングの方法である。

訳注5：ここで述べられているのは「インタビューをする・される」という状況について、人々は直接的・間接的な知識をもっている、ということである。誰しも、テレビのニュース番組などの視聴経験から、インタビューという状況下で展開される会話になんらかの予測をもっており、それに基づいて、ふるまい方を決定する。

訳注6：ここで「語らざるを得ない状況」と訳したツークツワンク(Zugzwang)は本来チェスの用語であり、日本語でも一部で「強制被動」と訳されるほかは、ドイツ語による表現が使用されている。その意味するところは、「動きの強制」「差し迫った状況」であり、チェスでも、できればパスをしたいがそれが許されない状況を指す。

訳注7：即興の語り(Stegreiferzählung)は、インフォーマントに準備する時間をあえて与えないままに発せられた語りを指す。体験と語りとの間に乖離が生じるのを防ぐ目的のもので支持されていた。

参考文献

Arbeitskreis Qualitative Sozialforschung (Hg.) Verführung zum qualitativen Forschen: eine Methodenauswahl. Wien, 1994.

Asadowskij, Mark. Eine sibirische Märchenerzählerin. Helsinki, 1926.

Atteslander, Peter. Methoden der empirischen Sozialforschung. 5. Auflage. Berlin, 1984.

Bausinger, Hermann. "Neue Felder, neue Aufgaben, neue Methoden." In Deutsche Volkskunde – französische Ethnologie. Zwei Standortbestimmungen, hg. von Isaac Chiva und Utz Jeggle, 326–344. Frankfurt a. M. / New York, 1987.

Berger, Peter L., und Thomas Luckmann. Die gesellschaftliche Konstruktion der Wirklichkeit. Eine Theorie der Wissenssoziologie. Frankfurt a. M., 1980.

Brake, Klaus. Lebenserinnerungen rußlanddeutscher Einwanderer: Zeitgeschichte und Narrativik. Lebensformen 9. Berlin / Hamburg, 1998.

- Brednich, Rolf Wilhelm. "Quellen und Methoden." In Grundriß der Volkskunde. Einführung in die Forschungsfelder der Europäischen Ethnologie, hg. von Rolf Wilhelm Brednich, 73–93. Berlin, 1988.
- Brinkmann, Otto. Das Erzählen in einer Dorfgemeinschaft. Münster, 1933.
- Bryman, Alan, and Robert G. Burgess, eds. Qualitative Research. 4 vols. London, 1999.
- Buchner-Fuhs, Jutta. "Die Fotobefragung – eine kulturwissenschaftliche Interviewmethode?" Zeitschrift für Volkskunde 93 (1997): 189–216.
- Bude, Heinz. "Der Sozialforscher als Narrationsanimateur. Kritische Anmerkungen zu einer erzähltheoretischen Fundierung der interpretativen Sozialforschung." Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie 37 (1985): 327–336.
- Dittmar, Norbert. Transkription. Ein Leitfaden mit Aufgaben für Studenten, Forscher und Laien. 2. Auflage. Qualitative Sozialforschung 10. Wiesbaden, 2004.
- Dornheim, Jutta. Kranksein im dörflichen Alltag. Soziokulturelle Aspekte des Umgangs mit Krebs. Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Instituts der Universität Tübingen 57. Tübingen, 1983.
- Fischer, Hans. "Einleitung." In Feldforschungen. Berichte zur Einführung in Probleme und Methoden, hg. von Hans Fischer, 7–22. Berlin, 1985.
- . "Feldforschung." In Ethnologie. Eine Einführung, hg. von Hans Fischer, 69–88. Berlin, 1983.
- . (Hg.). Feldforschungen. Berichte zur Einführung in Probleme und Methoden. Berlin, 1985.
- Flick, Uwe (Hg.) Handbuch qualitative Sozialforschung. Grundlagen, Konzepte, Methoden und Anwendungen. 2. Auflage. Weinheim, 1995.
- . Qualitative Forschung. Theorie, Methoden, Anwendung in Psychologie und Sozialwissenschaften. Reinbek bei Hamburg, 1996.
- Fuchs, Werner. Biographische Forschung. Eine Einführung in Praxis und Methoden. Wiesbaden, 1984.
- Fuchs-Heinritz, Werner. "Soziologische Biographieforschung: Überblick und Verhältnis zur Allgemeinen Soziologie." In Biographische Methoden in den Humanwissenschaften, hg. von Gerd Jüttemann und Hans Thomae. Weinheim / Basel, 1998.
- Gadamer, Hans-Georg. Wahrheit und Methode. Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik. 4. Auflage. Tübingen, 1975.
- Glaser, Barney G., and Anselm L. Strauss. The Discovery of Grounded Theory: Strategies of Qualitative Research. Chicago, 1967.
- Hermanns, Harry. "Narratives Interview." In Handbuch qualitative Sozialforschung. Grundlagen, Konzepte, Methoden und Anwendungen, hg. von Uwe Flick, 2. Auflage., 182–185. Weinheim, 1995.
- Hoffmann-Riem, Christa. "Die Sozialforschung einer interpretativen Soziologie. Der Datengewinn." Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie 32 (1980): 339–372.
- Honvehlmann, Hubert. Nachbarschaften auf dem Lande. Gegenwärtige Formen im nordwestlichen Münsterland. Beiträge zur Volkskultur in Nordwestdeutschland 68. Münster, 1990.
- Hopf, Christel. "Die Pseudo-Exploration – Überlegungen zur Technik qualitativer Interviews in der Sozialforschung." Zeitschrift für Soziologie 7, Nr. 2 (1978): 97–115.
- . "Qualitative Interviews in der Sozialforschung. Ein Überblick." In Handbuch qualitative Sozialforschung. Grundlagen, Konzepte, Methoden und Anwendungen, hg. von Uwe Flick, 2. Auflage. Weinheim,

- 1995, 177-181.
- Jeggle, Utz (Hg.) *Feldforschung. Qualitative Methoden der Kulturanalyse*. 2. Auflage. Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Instituts der Universität Tübingen 62. Tübingen, 1984.
- . “Zur Geschichte der Feldforschung in der Volkskunde.” In *Feldforschung. Qualitative Methoden der Kulturanalyse*, hg. von Utz Jeggle, 11–54. Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Instituts der Universität Tübingen 62. Tübingen, 1984.
- Kaase, Max (Hg.) *Qualitätskriterien der Umfrageforschung: Denkschrift. Quality Criteria for Survey Research: Memorandum*. Berlin: Deutsche Forschungsgemeinschaft, 1999.
- kea – Zeitschrift für Kulturwissenschaften. Heft 4: *Writing Culture*. 1992.
- Kleinig, Gerhard. “Methodologie und Geschichte qualitativer Sozialforschung.” In *Handbuch qualitative Sozialforschung. Grundlagen, Konzepte, Methoden und Anwendungen*, hg. von Uwe Flick, 2. Auflage., 11–22. Weinheim, 1995.
- König, René. *Das Interview. Formen – Techniken – Auswertung*. 9. Auflage. *Praktische Sozialforschung* 1. Köln, 1974.
- Kuntz, Andreas. “Biographie und biographisches Objekt. Zur Bedeutung von Erinnerungsgegenständen in lebensgeschichtlichen Berichten.” In *Auf der Suche nach der verlorenen Kultur. Arbeiterkultur zwischen Museum und Realität. Gedenkschrift für Helmut Paul Fielhauer*, hg. von Olaf Bockhorn, Helmut Eberhard, und Wolfdieter Zupfer, 165–183. Wien, 1989.
- . “Erinnerungsgegenstände. Ein Diskussionsbeitrag zur Erforschung rezenter Sachkultur.” *Ethnologia Europaea* 20 (1990): 61–80.
- Lamnek, Siegfried. *Qualitative Sozialforschung*. 2 Bände. 3. korrigierte Auflage. Weinheim, 1995.
- Lehmann, Albrecht. “Autobiographische Methoden. Verfahren und Möglichkeiten.” *Ethnologia Europaea* 11 (1979/80): 36–54.
- . *Erzählstruktur und Lebenslauf. Autobiographische Untersuchungen*. Frankfurt a. M. / New York, 1983.
- Lindner, Rolf. “Die Angst des Forschers vor dem Feld. Überlegungen zur teilnehmenden Beobachtung als Interaktionsprozeß.” *Zeitschrift für Volkskunde* 77 (1981): 51–66.
- . “Ohne Gewähr. Zur Kulturanalyse des Informanten.” In *Feldforschung. Qualitative Methoden der Kulturanalyse*, hg. von Utz Jeggle, 2. Auflage., 59–80. Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Instituts der Universität Tübingen 62. Tübingen, 1984.
- Luckmann, Thomas. “Grundformen der gesellschaftlichen Vermittlung des Wissens: Kommunikative Gattungen.” In *Kultur und Gesellschaft*, hg. von Friedhelm Neidhardt, M. Rainer Lepsius, und Johannes Weiss, 191–211. Opladen, 1986.
- Marcus, George E., and Michael M. Fischer. *Anthropology as Cultural Critique. An Experimental Moment in the Human Sciences*. Chicago, 1986.
- Matter, Max. *Wertsystem und Innovationsverhalten. Studien zur Evaluation innovationstheoretischer Ansätze durchgeführt im Lötschental/Schweiz. Kulturanthropologische Schriften* 3. Hohenschäftlarb, 1978.
- Mayring, Philipp. *Einführung in die qualitative Sozialforschung. Eine Anleitung zu qualitativem Denken*. 5. überarbeitete Auflage. Weinheim, 2002.
- . “Qualitative Inhaltsanalyse.” In *Handbuch qualitative Sozialforschung. Grundlagen, Konzepte, Me-*

- thoden und Anwendungen, hg. von Uwe Flick, 2. Auflage., 209–213. Weinheim, 1995.
- Merton, Robert, and Patricia Kendall. "The Focussed Interview." *American Journal of Sociology* 51 (1946): 541–557.
- Overdick, Thomas. "Ethnofotografie. Versuch einer Repositionierung volkskundlicher Fotografie." In *Fotografien vom Alltag – Fotografieren als Alltag*, hg. von Irene Ziehe und Ulrich Hägele, 17–26. Münster, 2004.
- Reichert, Jo. "Objektive Hermeneutik." In *Handbuch qualitative Sozialforschung. Grundlagen, Konzepte, Methoden und Anwendungen*, hg. von Uwe Flick, 2. Auflage., 223–228. Weinheim, 1995.
- Richardson, Stephen A., Barbara Snell Dohrenwend, and David Klein. "Die 'Suggestivfrage' – Erwartungen und Unterstellungen im Interview." In *Qualitative Sozialforschung*, hg. von Christel Hopf und Elmar Weingarten, 3. Auflage., 205–231. Stuttgart, 1993.
- Schenda, Rudolf. "Einheitlich – urtümlich – noch heute. Probleme der volkskundlichen Befragung." In *Abschied vom Volksleben*, 2. Auflage., 124–154. Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Instituts der Universität Tübingen 27. Tübingen, 1986.
- Scheuch, Erwin K. "Das Interview in der Sozialforschung." In *Handbuch der empirischen Sozialforschung. Bd. 2: Grundlegende Methoden und Techniken. Erster Teil.*, hg. von René König, 66–190. Stuttgart, 1967.
- Schlehe, Judith. "Formen qualitativer ethnografischer Interviews." In *Methoden und Techniken der Feldforschung*, hg. von Bettina Beer, 71–93. Berlin, 2003.
- Schmidt-Lauber, Brigitta. "Die verkehrte Hautfarbe". *Ethnizität deutscher Namibier als Alltagspraxis. Lebensformen* 10. Berlin / Hamburg, 1998.
- . *Gemütlichkeit. Eine kulturwissenschaftliche Annäherung*. Frankfurt a. M., 2003.
- Schröder, Hans Joachim. *Die gestohlenen Jahre. Erzählgeschichten und Geschichtserzählung im Interview: Der Zweite Weltkrieg aus der Sicht ehemaliger Mannschaftssoldaten. Studien und Texte zur Sozialgeschichte der Literatur* 37. Tübingen, 1992.
- Schütze, Fritz. *Die Technik des narrativen Interviews in Interaktionsfeldstudien – dargestellt an einem Projekt zur Erforschung von kommunalen Machtstrukturen. Universität Bielefeld, Fakultät für Soziologie, Arbeitsberichte und Forschungsmaterialien* 1. Bielefeld, 1977.
- Sedlacek, Dietmar. "...das Lager läuft hinterher". *Leben mit nationalsozialistischer Verfolgung. Lebensformen* 8. Berlin / Hamburg, 1996.
- Soeffner, Hans-Georg. *Auslegung des Alltags – Der Alltag der Auslegung. Zur wissenssoziologischen Konzeption einer sozialwissenschaftlichen Hermeneutik*. Frankfurt a. M., 1989.
- Spradley, James P. *The Ethnographic Interview*. New York u.a., 1979.
- Strauss, Anselm L. *Grundlagen qualitativer Sozialforschung: Datenanalyse und Theoriebildung in der empirischen und soziologischen Forschung*. München, 1994.
- Welzer, Harald. "Das Interview als Artefakt. Zur Kritik der Zeitzeugenbefragung." *BIOS. Zeitschrift für Biographieforschung und Oral History* 13, Nr. 1 (2000): 51–63.
- Welz, Gisela. "Moving Targets. Feldforschung unter Mobilitätsdruck." *Zeitschrift für Volkskunde* 94 (1998): 177–194.
- . *StreetLife: Alltag in einem New Yorker Slum. Kulturanthropologie-Notizen* 36. Frankfurt a. M., 1991.
- Witzel, Andreas. *Verfahren der qualitativen Sozialforschung. Überblick und Alternativen*. Frankfurt a. M., 1982.

解題

ブリギッタ・シュミット - ラウバー 質的インタビュー、あるいは対話の技能

OIKAWA Shohei
及川 祥平

CHRISTIAN GÖHLERT
クリスチャン・ゲーラット

本稿は、ブリギッタ・シュミット-ラウバー (Brigitta Schmidt-Lauber) の「質的インタビュー、あるいは対話の技能 (Das qualitative Interview oder : Die Kunst des Reden - Lassens)」の全訳である。

日本の民俗学の国際化の遅れ、あるいは学際化への対応のなさは、ながらく問題点として反省的に批判されてきた。近年は中国・韓国等の東アジアの民俗学間での連携や、ドイツ語圏、アメリカの民俗学との交流が重点的に試みられている。本誌『日常と文化』もそのような実践の一つであることは言うまでも無い。訳者らは 2011 年のアルブレヒト・レーマン (Albrecht Lehmann) の日本民俗学会における招聘事業以降、上記の問題点の克服にむけたささやかな取り組みとして、レーマン氏が編者に加わっているドイツ民俗学の方法論の手引書『民俗学の方法 (Methoden der Volkskunde)』の翻訳に取り組んできた。同書はドイツ語圏の民俗学の状況がコンパクトにまとめられており、ドイツ語圏の大学でもテキスト化されている。ドイツ語圏の状況を知る上で適切な文献であり、日独間の民俗学を方法的レベルで比較可能にし、両者の交流を促進する上でも必読の書といえるだろう。ここに翻訳したブリギッタ・シュミット - ラウバー論文もまた同書に収録されており、ドイツ民俗学における調査法を歴史的かつ方法論的に詳述するものである。

本稿の原著者ブリギッタ・シュミット・ラウバー氏はドイツ語圏の民俗学における方法的議論に長けた研究者の一人である。氏は『民俗学の方法』において、「フィールドワーク-参与観察による文化分析 (Feldforschung – Kulturanalyse durch teilnehmende Beobachtung)」なる章も担当している。氏はドイツ北部の都市キールに生まれ、キール大学、ハンブルク大学、ケルン大学で民俗学・民族学・社会史・経済学をおさめた。氏からの私信によれば、民俗学者のアルブレヒト・レーマン (Albrecht Lehmann)、民俗学者・民族学者でもあるトーマス・ハウシルド (Thomas Hauschild)、アフリカ研究の民族学者ユルゲン・イェンセン (Jürgen Jensen) に影響を受けたといい、複数ディシプリンの蓄積を吸収しながら研究者として自己をビルドアップしてきた。教歴としては、客員教授・講師としてウィーン大学、ゲッティンゲン大学、バーゼル大学、チューリッヒ大学、ハンブルク大学で教鞭をとったのち、2006 年からゲッティンゲン大学文化人類学・ヨーロッパエスノロジー研究所で教授を務め (2009 年まで)、以降はウィーン大学ヨーロッパエスノロジー研究所の所長に就任している。

シュミット-ラウバー氏の研究領域は、現在の日常文化、都市文化、移民研究にわたっている。1997年に、幅広いフィールドワークの成果と歴史学的アプローチに基づく『「おかしな肌の色」—ナミビア系ドイツ人の日常の実践としてのエスニシティ（“Die verkehrte Hautfarbe”. Ethnizität deutscher Namibier als Alltagspraxis）』（Berlin/Hamburg: D. Reimer, 1998）で博士の学位を取得し、2003年には日常文化に重点をおいた『居心地—文化学的アプローチ（Gemütlichkeit. Eine kulturwissenschaftliche Annäherung.）』（Frankfurt a.M./New York: Campus, 2003）によって大学教授資格を取得している。都市文化論については、「中規模の都市（Mittelstadt）」への関心を、独自の視点としてあげることができるだろう。氏は人口2万～10万人程度の都市の研究を重視している。それは、従来の都市研究が大都市に関心を向け、大都市を基準とした議論を組み立ててきたことに対する批判でもあるという。

日本の民俗学では、「話者」（インフォーマント）との対話的データ収集法を「聞き書き」の名で呼びならわしてきた。無論、それは学際的次元では質的インタビューに包摂されるものであり、文化人類学や一部の社会学・歴史学でも基礎的方法とされている。日・独の民俗学のインタビューをめぐる方法的相違の相違を端的に指摘するならば、学の伝統を現在の主要な方法論とからめながら固有の技法として昇華させていく方法「論」のあり方ではあるまいか。

ドイツ語圏の民俗学には民話研究の伝統がある。口頭での会話を介したデータ収集を、固有の学史（あるいは学的個性）として認識している。隣接分野における口述データの取り扱いに対し、民俗学がどのような独自性を主張できるかがよく理解されているといえる。現在のドイツ語圏においては、民俗学は文化人類学と（そして経験文化学やヨーロッパエスノロジーと）称しているが、日本の民俗学の場合、海外調査を基本とするエスノロジーから展開した文化人類学との間にどのような方法的相違を見出すことができるのだろうか。あるいは、どのような悩みや強みを共有しているのだろうか。方法論的水準での対話は必ずしも十分に尽くされているとは言えない。それは、一部の社会学や歴史学との相違を、どのような学的伝統のもとで強調できるのかという問題とも関わっているだろう。2010年に開催された日本民俗学会の国際シンポジウム「オーラルヒストリーと〈語り〉のアーカイブ化に向けて—人類学・歴史学・社会学との対話」において展開されたような議論が、今後より深められていくべきと認識する。

一方、日・独の民俗学的方法的相違を考えた時、日本においては「よい話者」からは早くに峻別された村の有識者への調査を、ドイツ民俗学は比較的近年まで堅持してきたことが本稿からはわかる。このような「代表性の原則（Gewährmannsprinzip）」のあり方をはじめ、方法論をめぐる学史の中に垣間見える微細な相違にこだわっていくことは、日・独の民俗学の性格的相違や共通性、今後の連携のあり方を考えていく上で有益な示唆を与えるものであろう。